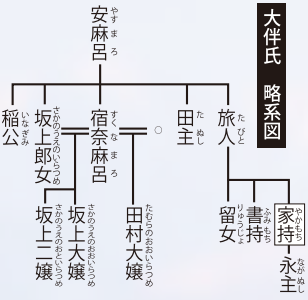
大伴家持（おおとものやかもち）



大伴家持は、奈良時代の貴族・歌人であり、歌人 大伴旅人の子として生まれ、少年時代に女流歌人を代表する叔母・坂上郎女から教育を受け、生涯で多くの秀歌を残しています。

家持は、波瀾の万葉歌人と言われ、その人生は左遷と昇進の繰り返しでした。もともと大伴氏は大和朝廷以来の武門の名家であり、祖父・安麻呂、父・旅人と同じく律令国家の高級官吏としても歴史に名を残し、大伴氏の長として、越中守、因幡守、薩摩守、相模守、伊勢守などを歴任し、参議、従三位となりました。奈良時代において中央政界で台頭する藤原一族に対して、名門氏族の棟梁であった家持は、「反藤原」の動きに関わることも多く、地方官僚への赴任と中央官僚復帰を繰り返しました。

東国の蝦夷征討の責任者となった翌年785（延暦4）年に68歳の生涯を閉じましたが、没後も波瀾に満ちたものでした。家持が没した同年9月に天皇の寵臣 藤原種継の暗殺が起こり、その首謀者の一人として家持が関与していたとされ、死後、官位等すべての名誉を剥奪、実子の永主は隠岐に流されました。その後、桓武天皇は重なる不幸を藤原種継事件で憤死した早良親王の祟りによるものと恐れ、約20年後の806（延暦25）年の天皇崩御の日に恩赦を与え、家持は従三位に復しました。

現在から遡ること約1260年前の758（天平宝字2）年に、家持は因幡国（現在の鳥取県東部）の国守（政務全般を統括する長官）として赴任しました。赴任した翌年の元日は、豊年の吉兆とされる正月の雪に加え、正月新年と立春新年が重なる19年に一度の珍しい歳旦立春という非常に縁起の良い日でした。この日に因幡国庁で詠んだ「新しき 年の始の 初春の 今日降る雪の いや重け吉事（新しい年のはじめの、初春の今日降りつもる雪のように、いよいよ積もり重なれ。よい事が。）」は後に『万葉集』の最後を飾る歌となるとともに、この歌を最後に家持が詠んだ歌は見つかっていません。長歌・短歌など合計約470首が『万葉集』に収められており、『万葉集』全体の１割を超えていることから家持が『万葉集』の編纂に関わったと考えられています。

家持は年長の歌人・文化人である山上憶良の影響を強く受けていると言われています。

父・旅人が大宰帥として大宰府に赴任する際に同行したという説が有力ですが、当時まだ少年だった家持は梅花の宴に出席した32人の歌人の中には入っていません。梅花の宴で歌を詠む父・旅人や憶良を少年時代の家持は、まぶしく見つめていたかもしれません。

家持は自然描写のなかに自分の心情を重ねた歌を多く詠んでおり、その中でも次の歌は家持の「春愁絶唱三首」と称せられ、因幡国庁で詠んだ万葉集最後を飾る歌とともに家持の代表作となっています。

- 春の野に 霞たなびき うら悲し この夕影に うぐひす鳴くも（春の野に霞がたなびいて、心は悲しみに沈む。この夕暮の光の中でうぐいすが鳴いているよ。）
- 我がやどの い笹群竹 吹く風の 音のかそけき この夕かも（わが家の少しばかりの竹群を吹く風の音がかすかに聞こえる、この夕ぐれの物さびしさよ。）
- うらうらに 照れる春日に 雲雀上がり 心悲しも ひとりし思へば（うららかに照っている春の日の光のなかに、ひばりの鳴きのぼる声が聞こえて、心が悲しいことよ。ひとりで物思いにふけっていると。）

因幡国庁跡航空写真
（写真提供＝鳥取市教育委員会）

因幡国庁跡と面影山

① 因幡国庁跡（国史跡）

因幡国庁跡は平安時代から鎌倉時代にかけて因幡国を治めていた役所の跡であり、大伴家持は因幡国の国守として赴任しています。国庁から東に甑山、西に面影山、南に今木山の因幡三山が三方に見えます。国庁を含む国府域は約六町（約654m）四方と推定され、南側には国分寺や国分尼寺が配置されています。

1977（昭和52）年に僅か20数センチの地下から柱根を残した建物遺構が発見され、国史跡に指定されています。

所 鳥取市国府町中郷

交 JR鳥取駅バス3番乗り場から中河原線「宮ノ下」下車、徒歩15分

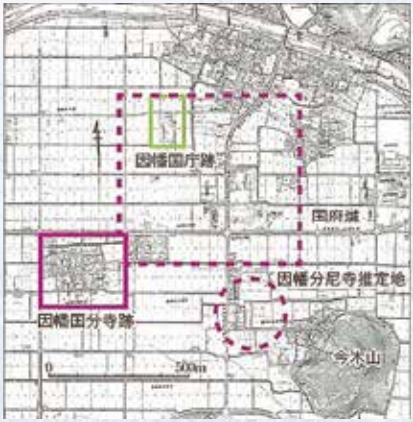
因幡国庁の一般的な復元イメージ

② （因幡）国分寺の礎石（鳥取市保護文化財）

741（天平13）年に聖武天皇の勅願により創建。因幡国府の南西500mに位置し、発掘調査では塔や南門、寺域を示す築地塀、掘立柱建物が確認されました。発掘された礎石が保存されています。

所 鳥取市国府町国分寺

交 JR鳥取駅バス3番乗り場から中河原線「宮ノ下」下車、徒歩20分



因幡国府域想定図
（『鳥取県の考古学』第6巻（2013）より転載）

（因幡）国分寺の礎石

※交通情報は2019年10月現在のものです。